Philip Roth の小説 *Goodbye, Columbus* の世界

岩 山 太 次 郎

1

Philip Roth (1933—) が小説部門で1960年度の National Book Award を受けた *Goodbye, Columbus and Five Short Stories* を1959年に出版したとき，彼はまだ弱冠26歳であった．その後今日まで，*Letting Go* (1962) と *When She Was Good* (1967) の二冊の長篇小説を出版している．*Time* 誌 (1968年7月19日号) の伝えるところによると，四つの雑誌にすでにその半分ほどが発表されている次作 *Portnoy's Complaint* も近く出版のはこびになるそうである． これが現在35歳の Philip Roth の小説のすべてである．

2

Roth は現代のユダヤ系アメリカ人の生活を描くユダヤ系の小説家である．アメリカの現代の小説家にはユダヤ系の小説家が数多くいるが，特にユダヤ系であるということをそれらすべての小説家たちの作品で必ずしも問題にしなくてもよい．自分がユダヤ系であるという特権を利用して，かつての「地方色小説家」がそれぞれの地方色の強い作品を書いたように，ユダヤ色の濃厚な作品を書くことを主眼としている作家もある．少し古い作品ではあるが，Laura Hobson の *Gentlemen's Agreement* (1947) や Irwin Show の *The Young Lions* (1948) がこの種のものであると言えよう． Herman Wouk の *Marjorie Morningstar* (1955) や Jerome

Weidman の小説もこれである．このようなものには「ユダヤ系」小説家にしか書けないというなにかが欠けている．

またあるものは，ユダヤ系の小説家であっても，ユダヤ系の人たち特有の世界からはなれて，自分自身の独自の世界の中で作品を書き，ユダヤ系アメリカ人の問題に鋭いメスを入れることからは問題を掘りさげないものもいる．さしづめ Nathanael West や J. D. Salinger などはこの種の代表的な立派な小説家であろう．こういう作家の場合は，その作家が「ユダヤ系」であるということをとりたてて論ずる必要はないのである．

ところが，Saul Bellow や Bernard Malamud，あるいは Paul Goodman の小説では，彼らが「ユダヤ系」の小説家であるということを問題にせずには論じることができない．ユダヤ系アメリカ人の現代の生活は，たしかに，特異なものである．そのため，それを描くときには作家はその特異性におぼれてしまい，想像力のとぼしい作品を書き，ノスタルジィアにあふれたものになり，現代社会での真実性にとぼしい作品を書きがちである．でなければ，想像力によるよりは，ユダヤ人の世界観や伝統を守ることや，600万のユダヤ人の運命やジエンタイルとの共存生活の方法に主たる関心を向けてしまって，議論ばかりする作品を書いてしまうことが多い．最近までのユダヤ系アメリカ作家の多くはこのいずれかであった．しかし，Bellow や Malamud の小説にはそういうところはない．ユダヤ系アメリカ人のもつ特異性の中に人間の普遍的ななにかを見いだして，それを想像力でもって描きあげている．（もちろん，*The Fixer* のような例外もいくつかある．）ここで論じようとすることは Philip Roth の小説は最初の *Goodbye, Columbus* からすでにこういう要素をもったものであったということである．

3

Goodbye, Columbus and Five Short Stories の冒頭を飾る "Goodbye,

Columbus" は中篇小説である．New Jersey 州の Newark 市立図書館で働いているユダヤ系アメリカ人で Rutgers 大学卒業生で23歳の青年 Neil Klugman と Newark の新興成金で今は郊外に住む両親をもった Radcliffe 大学在学中の Brenda Patimkin との夏休みの間の愛の物語であり，他の五つの短篇小説（"The Conversion of the Jews," "Defender of the Faith," "Epstein," "You Can't Tell a Man by the Song He Sings" と "Eli, the Fanatic"）と同じように，現在，見たり感じたりするユダヤ系の人たちの伝統的価値感やそれにともなう行動との間の葛藤を描いたものである．オーソドックスなユダヤ系アメリカ人の伯母 Gladys のもとをはなれて一人で生活している Neil が食糧品とスポーツ用具の販売で財をなし町をはなれて最近郊外に移住した現代のアメリカの中流階級の代表的な家庭の娘を愛するようになり，その家庭に招かれて家族の一員のごとく生活をする中で，彼は Patimkin 家のもののもっている尊大さ，とりすましたところ，強欲な点などにたいして批判をする．これは社会的な批判として提示されているのではなく，むしろ，ここでなされているのは道義的な意味での批判である．これはキリスト教徒の社会におずおずと同化しようとするユダヤ系の人物 Eli を描いた "Eli, the Fanatic" と同じように，また，*Letting Go* の Gabe Wallach の脇役のユダヤ系アメリカ人 Paul Herz の妻になったカトリック教徒の Libby のユダヤ教への改宗などと同じく，作者がおこなっているのは道義的な意味での批判である．なぜなら，作者は，社会的にも人種的にも他のものに同化した人物たちを描いて，彼らに何らかの批判を加えるとき，彼らをカントリー・クラブの会員に認めるとか，子供たちのかよう学校とか，参加するユダヤ人集会などといった外的なことがらだけによって人物たちを異質な世界に入れて終ってしまうのではなく，その時におこるユダヤ人としての道義的な属性感に悩む心の微妙な変化を問題として追求しているからである．この意味で，この中篇小説 "Goodbye, Columbus" は Neil Klugman の Gadys 伯母

や Brenda Patimkin への道義的な要求の物語であると同時に，それを通して Neil みずからが「自分は何者であるか」を明かそうとする自己への道義的な問いかけの物語でもある．

最初 Neil Klugman は Gladys 伯母は「パレスチナの悲しいユダヤ人」を今だに信じている時代遅れの人間であるから，その古い世界観ではカントリー・クラブに入会している Patimkin 家のような新しいユダヤ人を認められない狂った人間であると考える．しかし，後にそういう新しいユダヤ人は実はゆがんだ認識しかもっていないものであることを知る．彼らは今住んでいる Newark 市郊外の Short Hills の地を「天国」と思っているが，そこでの生活は Newark の町での過去の生活を無視したものであり，そのような生活は馬鹿げたものであると Neil は考える．Patimkin 家のものたちは，彼らの過去の生活を否定しては本当には生きられないものである．「Newark での Patimkin 家の昔の思い出の物——あの背の高い古い冷蔵庫」を人目からは隠すことはできても，今でもそれは彼らの家に保存されているし，Brenda の父 Patimkin 氏は，Newark の昔の近所の人たちの間で働いていて，そこでしか居心地よく感じられず，そこを離れることができないのである．こういう Patimkin 家の人たちの中に Neil はユダヤ人の不滅の姿を見る．しかし，Neil はユダヤ人の不滅を嫌う．ユダヤ人の歴史には彼に何一つとして与えてくれるものはない．Gladys 伯母も Patimkin 氏も Neil には助けとはならないし，彼らの方も Neil を助けようともしない．Patimkin 夫人は娘の箪笥の引き出の中に "diaphragm" を発見し Brenda と Neil の間をさこうとするし，Gladys 伯母はただ自分の家へ帰って来いということだけを言う．Neil はユダヤ人の伝統行事である新年の祝いもせずに，古いユダヤ人にも新しいユダヤ人にも別れをつげなければならない．彼は自分の正体をどこにも発見できないのである．

このような「デイスプレイスト・パースン」はいろいろな作品に出てくる．これは "The Conversion of the Jews" や "Defender of the Faith"

についても言える．“The Conversion of the Jews” の Ozzie Freedman 少年は自分の理解できない昔からあるユダヤ教の教義の陰からなんとかして抜けだそうと苦しむし，“Defender of the Faith” の Sergeant Nathan Marx は自分がユダヤ人であるということにはもはや確乎たる感情を持たず，自分の正体をみつけるために苦しむ．彼らもやはり「デイスプレイスト・パースン」なのである．

Ozzie Freedman は自分のかよっているヘブライ学校に自分を同化させられない．彼はラバイに「神様はなぜ女の人に性の交りをさせないで赤ん坊を生ませることができないのですか」といったような質問をして，ラバイをあざける．Ozzie は律法尊重の強いユダヤ教にはにつかわしくないような奇蹟の数々がイエスにはあるから，イエスに強くひかれる．「選ばれた民」ということやユダヤ教そのものにも疑惑を感じるが，宗教儀式だけは愛する少年である．安息日にろうそくに火をつけるときに電話のベルが鳴っても彼は怒る：「お母さんがろうそくに火をともすとき，Ozzie は音は一切たててはならないと思った．呼吸ですら，もしできることなら，和らげなければならないのだ．」この少年がこんなに不安を抱くのは，神聖さというものは人間の不完全さによって穢されてはならないものであり，そういう神聖さをもとめているからである．彼はすべてが純粋で神聖なイスラエルをもとめている．ところが彼のラバイはすでに他と同化してしまっている．一体この少年かあるいはラバイか，そのどちらが本当のユダヤ人なのであるか，パレスチナの地を失い，そこを追放されたユダヤ人の苦しみを誰が本当に理解しているのかをここで作者は問いかけようとしているのである．

Ozzie は何処へ行くのかも知らずに，ユダヤ教会堂の屋根に走り上る．そして，母やラバイに神は何でもできるということを認めさせようとする——男と女との交りなしに子供を創造することもできることを．彼はこのようにして，瞬間の勝利を得るが，黄い網の上におりたとき，Ozzie は再

びパレスチナを追放されたユダヤ人のいる地にもどってしまうのである．そこはやはり聖地ではない．Ozzie は教会堂の屋根の上でしか聖地に生きられなかったのである．ここに見るものは純真な子供を通しての自己の正体の認識であり，それは純粋であるため一層悲劇的である．

こういう Roth のデイレンマの悲劇性は "Defender of the Faith" にもみられる．ここでは子供の悲劇ではなく兵卒の心を知る軍曹の苦悩である．物語の語り手 Sergeant Nathan Marx は「幸運にも歩兵の心をもちつづけた．歩兵の心は彼の足のように最初は痛みはれあがるが，最後には角のように堅くなって何も彼に感じさせずにこのすごい道を歩かせるのである．」 Marx はこうしてドイツとの戦争を生きぬいてきたのであるが，平和な時にはそれが役立つだろうか． Marx の相手役の兵卒 Sheldon Grossbart は彼以上に鋭敏な感情をもっている．

Marx は現在新兵の一団を訓練する命を受けている．その新兵の一人に Grossbart がおり，Marx は彼を特にきびしく訓練しなければならないのである．Grossbart は Marx に何週間もの間，おたがいにユダヤ人であるからと言って取引きをしようとしている．Marx はそれにたいして，意識的に何かで対抗しようとするが，Grossbart は憐憫を得て自分を保持しようとする．二人はどうしても調和しあわない．Marx は Grossbart はユダヤ人感情をもてあそんでいると思うが，Grossbart を変えさせることができない． Marx は Grossbart に復讐心をもつ． 復讐することにより「信仰が守れる」という正義の行為であると自分に言いきかせる．しかし信仰を守るためにした行為は思いどおりの結果にはならない．「この数日間自分の心を乱してきた多くのことを思いめぐらす中で，彼は子供の時から聞いていた祖母の言葉『お前はなんという頑固なことをしているのか』を聞いた．」そして， Marx はユダヤ人としての自分の姿を知る． しかし彼の認識は自己の正体の認識だけにとどまり，Grossbart の人間らしいところを認容はできない．Grossbart は Marx が自己を知るためのみの身代りに

なっただけである.

"Eli, the Fanatic" の問いかけもこういうユダヤ人同志の間の正体認識への問いかけである. 「現代的社会」とされている Woodenton 郊外に住む弁護士 Eli Peck は Leo Tzuref 邸では場所ちがいなところにいる気がする. Woodenton の商店は「黄色で」, 鮮やかな色をしていて, 魅力的であるが, 邸宅は古びてゆがんでいる. Eli は Tzuref を現代のさすらい人であると思うが, 彼と会っている内に, 妙な気持になる. そして, Tzuref の寄宿学校の生徒たちは Eil を身震いさせるし, Tzuref の難民の話も Eli を驚かせる, さらには, このさすらい人のユダヤ律法タルマッドのような帽子は Eli を完全に無気力にしてしまう. Eli は光の方へかけだし, 自分の家に帰りつきたく思う. しかし, 自分の家も異邦人の国のように感じられた. 自分はそこに属する人間ではないと思う. 妻や子供は近代化ということをしきりに言って, 神秘性を受け入れようとしない. Woodenton は彼にとってはイスラエルにはならないのである. そこで彼は Woodenton を離れて古い Tzuref の邸の方へ叫びながら走る. 人間の残酷な行為に悲鳴をあげたものたちのように, 自分もさすらい人であることを悟る.

そして, 掟よりも心である (「心は掟である, 神よ!」) という Tzuref の訴えやいづれの社会に本当は属しているのかという質問, ユダヤ教学校のものたちの経験している苦しみなどから, Eil は, 以前は自分に最上の服であったものすら, 自分には似っかわしいものではないことを知り, Tzuref が送ってきてくれた黒服を着る. ひげもカシディム風にはやし, 彼ら一族と同じ恰好をすることで, Eli はこの世界はおよそイスラエルとは似ても似つかないものであるが, それでも, もとの世界できびしい現実の追放者になるよりはよいと思う. Woodenton の人たちにとっては, Eli は自分たちが波風たてずに他と同化していた世界の回路を切断した不安定な存在であり, 完全には受け入れられない存在である. 友人たちも Eli の変りようを見て, また精神の挫折がおきたのだと思う. しかし, 作者は

こう書き加えている.「彼〔Eli〕は自分がなにであるかを骨の髄まで知った.」そして, 生れたばかりの息子の前に立って, Eli はこの子供はいつも自分がなにであるかを知っている, と言う.

この "Eli, the Fanatic" の Tzuref と Eli の関係は Malamud の *The Assistant* の Morris Bober と Frank Alpine との関係によく似ている. Eli が Tzuref のもとへ行くことは, Frank のユダヤ教への改宗による自己認識と相通じるものがある. しかし, Eli には Frank にみられるような「すべての人間はユダヤ人であり」そして「すべてのユダヤ人は『人間』である」といった確乎たる改宗への信念はない.

確乎たる信念に欠ける生活は弱さを感じさせるだけでなく, もろさがあり, 何時崩れるかもしれない. そういう生活には現代社会の悲劇の縮図をみるという感じよりも, 喜劇をみている感じがある. "Epstein" で描かれている世界はそういう喜劇の世界であり, そこには現代社会の皮肉がある.

"Epstein" の主人公 Epstein は中年の男である. 妻の Goldie の隣りのベッドに寝ている. 金曜日の夜でシャブアス(ユダヤ教の五旬節の祭り)のろうそくの火が階下でゆらいでいる. Epstein は安息日のことを考えず, 妻の Goldie のふいごのようなうしろ姿のことを考えている. その時, 階下へ引越してきた人たちのたてる音を耳にする. 彼の思いは現実と理想の夢の間を行ききしている. ある日新しく来た近所の Ida Kaufman を自分の自動車に乗せてやる. 親切, 善をほどこしたと思うが, 彼は結局彼女の愛を得ることになる. その結果 "prickly heat" ができる. この鼠径部の発疹こそが Epstein の存在証拠である. しかし, 彼は病める自分を守るすべを持っていない, ただ, 「まだ生きたい」と叫ぶだけである. 彼は身の汚れを非難され, 妻にも若い人たちにも裏切られ, 彼の世界は崩壊してしまう. そして家を去る. 何日かたって彼は Ida Kaufman の家で半死の状態でいるのを見つけられる. ここで彼ははじめて受け入れられる. 妻や他

の人からの憐みをも受けるし，発疹も治療できるのであるが，肉体的には以前よりもひどく弱くなってしまう．これは暗い，皮肉な，否定的な受け入れられ方である．

Neil Klugman は自分の感情を制禦しきれず新年の祝いもせず，新旧両方のユダヤ人からも離れて行ったし，Sergeant Marx は祖母の声を聞いて自分の頑固な行為を放棄したし，Ozzie Freedman は理解できぬユダヤ教の教義の陰からのがれるのに苦しんだ．Eli Peck は「心は掟である」という Tzuref の世界に入ろうとした．Epstein の受け入れられ方も理性によるものではなかった．これらのすべての行為は，理性では制禦できない感情の世界での出来事である．彼らが生きつづけることのできる唯一の道は理性による認識の世界においてではなく，*Goodbye, Columbus* の題詞のイイデイシユの諺「心はなかば予言者である」が示す感情の世界においてである．そこには理性による認識が存在しないため，生きることにたいする肯定的な答えはない．彼らの得る生きる方法は肯定の答えではない．しかし，それでも，生きることにたいする答えの一つになる可能性のある問いかけではある．

4

Roth は *Commentary* 誌の1961年3月号に発表した“Writing American Fiction”という評論で，現代アメリカ作家の直面しているいくつかの問題を論じている．一口に言って，アメリカの現代作家はよろよろとそれぞれの道を歩いているのだと言う．アメリカでは現実を信ずることができないほど現実は恐怖にみちたものである．「現実は作者の貧弱な想像力を麻酔させ，むかむかさせ，激怒させ，そして遂には現実は作家の想像力にはじゃまなものになっている．」「もし世界が私がこうなると思っているように，日々にゆがみ，非現実的なものになるのであるなら，もし人間が

この非現実に直面して日々にだんだん力のないものになるのを感じるのなら，もし，すべての生命がではないにしても，この不可避的な終焉が破壊的であるのならば，その時，生活の中で価値があってしかも文明のあるもので一体何が残るだろうか——その時，どうして作家は喜んでおれようか.」「アメリカの作家はアメリカの現実を理解しようと精一杯努力している．そして，それを描き，なんとか信じられるものにしようとしている.」しかし，アメリカの現実は作家の想像力を枯渇させるようなものなのである.

Roth はアメリカのこの現実で得られるような安易な肯定の答えを作者は拒絶すべきであると言う．そして，Ralph Ellison の描いた地下で待っているゆううつそうな「見えない人間」の姿にアメリカの現実をみている．ここでは論じなかったが，これは *Letting Go* で主人公 Gabe Wallach に執着心を感じさせずに，Iowa で，そして Chicago で多くの良いことがらをさせながら，結局はほとんど良いことはなにも成就させずに，また，自分のしてきたことに執着心をもたせずに小説を終らせているのと同じような現実把握の仕方である．これは，すでにみてきたように，*Goodbye, Columbus and Five Short Stories* を貫いている現実把握の仕方でもある．こういう把握の仕方をとおして，Roth はアメリカではパレスチナに住めないユダヤ系アメリカ人の苦悩を描いているのである．そして，そこに描れているのは確かに特異なユダヤ系アメリカ人の生活ではあるが，ユダヤ系人物の個々の生活には，「見えない人間」のいるアメリカ現代社会での人間の生きる苦悩の姿が描かれている．これこそユダヤ系作家にしか書けない小説である.